

【文学賞】

## ムギと俺の日曜日

紫 葉 柚 月

くしゃみが出た。続け様にもう一度。

なんだ。どうした？俺は花粉症じゃないはずだ。どうして、こんなにくしゃみが出る？寝ぼけた頭の中で？マークが飛びかっているところに、顔に何か当たった。

パタパタ。パタパタ。

俺の顔を叩きながらもその感覚はふわふわと、肌触りがいい。力を弱めてもらえば心地よい部類に入る感触だ。

目を開けると白い毛玉が視界を占領していた。パタパタと顔を叩いている正体不明のものはその毛玉から伸びていて、今度はおもむろに俺の鼻先をくすぐった。

「ハックション」

くすぐられた拍子に大きなくしゃみをもう一度して、すっかり目が覚めた。

う、頭が痛い。

ああ、そうか。昨日、SNSで見たくもないものを見てしまい気を紛らわそうとその場にあった日本酒をガブ飲みしたのだった。それから、俺は……。どうしたんだっけ？

よくよく見るとその毛玉の正体は猫だった。すごく毛が長い猫で、存在自体が大きなフワフワのマシユマロみたいに見える。その猫が俺に背を向けて長いしっぽを振り回しながら品よく座っていた。

頭の中心から背中にかけて白く輝く毛並みはまるで雪のようだ。よく見ると白い毛の中には、細かく散りばめられた茶色の毛が点在してキラキラと光を反射させていた。茶色の模様は、猫の耳の先や尾の部分、足元などに特に濃く現れており、まるでアートワークのように体を彩っている。くしゃみはこの猫のフワフワなしっぽが俺の鼻をくすぐりつづけたからにちがいない。

「おまえ、誰？」

猫は声に反応して動きを止め、ゆっくりと振り返った。そして静かに俺を見下ろした。

まだ頭がはつきりしないせいでろうか。

その猫の瞳を見つめた瞬間、何か強力な力に俺は吸い寄せられた。

遙か彼方の宇宙に広がる星雲のように神秘的で、静寂と深淵に満ちた世界に一瞬で迷い込んだ錯覚を覚えた。宇宙の秘密をすべて知り尽くしたような美しい琥珀色の瞳は俺が何を感じているのか、何に苦しんでいるのかを心の隅々まで、まるで見透かしているようだっ

た。

しばらく俺はその瞳に見とれていたが、猫はスツとその場から離れるとそこから中をクンクン匂いを嗅ぎながら探検し始めた。猫は目覚めた俺にはもう興味はないようだった。歩き回る猫は長い尾を左右に揺らし、まるで女王様のような優雅さを漂わせていた。

まてよ。

俺は猫を飼っていない。ということとは、ここは俺の家じゃないってことか？

ぐるりと見まわしてみたが、何度見ても、正真正銘、ここは二か月前に引越してきた俺の家だ。テレワークになってからというもの、コンビニに行くくらいで外に出ることもない、見慣れた、殺風景な部屋だ。

まだ頭は回らない。どうした、思いだせ。なんで猫が家にいる？

「痛えっ」

動いた瞬間、腰が悲鳴を上げた。どうやら俺は酔っぱらって、そのまま床に寝てしまっただようだ。身体は動かすたびにバキバキと音を立てた。

俺は起き上がるとキッチンに立ち、水と一緒に頭痛薬を口から流し込み、もう一度猫がなぜ家にいるのか考えた。謎はすぐに解けた。

正面のベランダが開いていた。昨日、酔っ払って火照った身体を冷やそうと開けた覚えがある。そしてそのまま寝てしまったのだろう。猫はここから入ってきたに違いない。

このマンションはペット同居が可能で、エレベーターで犬を連れてくる人と時々出会う。俺の部屋は四階の角部屋だ。上下階から降りてくることはないだろうから、唯一の隣、四〇五号室からこの猫は来たのだと俺は推理した。

慌ててベランダに出て確認してみた。隣接するベランダとベランダの間には、視線を遮るとともに防犯目的で薄い壁が立てられていた。その壁は十分な高さがあるものの、底部にはほんの少しの隙間が存在していた。

朝ベランダに出ると、熟れたいちごが隙間から緑色の葉っぱとともに時折顔を出していることがあった。隣の住人が育てているのだろう。

見つけるとちよつと笑顔になれる。ここに引越してから鬱々としている俺にとつて、朝日を浴びて甘い香りとともにほんのり輝くそのイチゴたちを見つけるとその瞬間だけ心が軽くなる。そつと隣の家のスペースに押し返すのだが、努力の甲斐なくいちごは毎日侵入を繰り返していた。こつそりと食べてしまおうかと思うこともあったが、日々の成長を静かに見守ることのほうが大切に思えた。

今朝も、いちごは下の隙間から顔を出していた。ここから入ってきたんだろうか？ いや、幅は三センチほどしかない。さすがに軟体動物じゃないとここからは入ることは不可能だろう。

ということは、幅十センチほどのベランダの手すりを伝ってきたということになる。こ

んな細い手すりを？

振り返って、モフモフの猫を観察してみる。長い毛は横に広がっていて横幅は、ざっと二十五センチくらいだろう。

「モフモフしても、猫だもんなあ」

細い手すりではあるが、猫の身体能力ならなんとか歩ける幅なのかもしれない。あんなモフモフの毛玉の塊がこんな狭いところをよく通ってきたものだと感心した。落ちなくてよかった。さすがに落ちたらケガだけじゃすまないだろう。ここまでたどり着いたのが不思議なくらいだ。

ここまで来れたのだから、放っておけばこの手すりを伝って自分から帰るかもしれない。けれど、落下の可能性は十分ありうる。

悩んでいると猫の姿が目に入った。

頭痛と気持ち悪さも抜けきっていないのにこの猫ときたら、俺を無視して自分の家のように女王様然で歩いている。

次第に腹が立ってきた。さつき瞳の美しさに心奪われたのは、二日酔いによる錯覚にちがいない。

ここは俺の家だぞ。一人になるために、借りた家だ。もういい加減、俺を一人つきりにさせてくれ。さっさと片を付けよう。

「仕方ない。お前のご主人さまに知らせてくるか」

壁の時計はすでに十二時を過ぎていた。

俺は隣の住人に会ったことがない。引越した際、隣に挨拶しに行くつもりでいたら、大家である神経質そうな老婦からコロナ禍だから接触を控えるため、挨拶はしなくていいと釘を刺された。

老婦は隣にどんな人物が住んでいるのかさえ教えてくれなかった。今の世の中、ご近所付き合いはなくても生きていけるのかもしれないと老婦の言葉の通り、俺は割り切ることにした。

そういえば、一度だけ隣人の声を聴いたことがある。テレワークをしているとき、大きな声が聞こえてきた。

「ムギちゃん、危ないから外に出ちゃだめよ」

中年と思われる野太い年配女性の声だった。

「ムギちゃん」ではなく「ちゃん」という部分にねっとりとした愛情を絡み付けた声は耳に今でも残っている。

つまり俺の中にインプットされた隣人の情報は、年配女性であること、おいしそうなイチゴを育てていること、ムギ、という溺愛する生き物があることの三点になった。

この「ムギ」というのが一体何の生き物なのか、以前にも想像したことがある。動物の

鳴き声を聞いたことがなかったので、うさぎや亀のように、声を出さない動物なのだろうと考えていた。

けれど、今日、はつきりした。おそらくこの猫がムギなのだろう。

確かに所々に美しい毛並みの中に茶がアクセントとして混ざっていて、ムギという名前がぴったりの容姿の猫だ。試しにきいてみる。

「お前、ムギって言うのか？」

そう問うとクンクンと家の中を物色していた猫は、ぴたりと動きを止めて俺を振り向きニャーと鳴いた。低くて豊かな歌声のような鳴き声だった。

「そうか、お前ムギって言うのか。ちょっと待ってろ。隣に行つて知らせてくるからな」俺は玄関を出ようとして、鏡に映つた自分の姿を見て思わず足を止めた。

鏡に映る男は二日酔いのうえ、髪はぼさぼさで、目の下には隈がくつきりと浮かび上がつていた。衣服も乱れており、Tシャツはしわくちやになつていた。

「こんな姿でお隣さんに初めて会うわけにはいかないか」

俺は急いで自分の部屋に戻り、まずはポロシャツに着替えた。次に顔を洗い、冷水で顔を何度もすすいだ。水の冷たさが少しだけ頭痛を和らげ、目も少しはクリアになる。

洗面所の鏡で自分の顔を確認し、髪を適当に整え、とりあえずは許容範囲だと判断した。けれど。

鏡の中の男は目が赤く、顔色も青白く、どこか人生に敗れたような表情をしていて情けなさを晒し出していた。

「おまえさ、なんて顔になってるんだよ」

目の前の男に侮蔑を込めて俺は声をかけた。

昨晩の画像が脳裏に浮かんた。思わず腹立たしきで手は自然と握りこぶしになり、指の関節が白くなるほど力が込められる。しかし、それは自分の胸に突き上げるような重みをただ増幅させただけだった。

とりあえず、隣に行かなくては。

身体を引きずるように、玄関を出て、隣の家のチャイムを鳴らした。これを機会に挨拶ぐらいはできるかもしれない。

しかし、期待に反して隣家から反応はなかった。

この家の住人は平日の昼間は仕事に出ているはずだ。なぜそう思うかというと、平日は一日中テレワークで自宅にいるのに、隣からほとんど物音が聞こえないからだ。週末には生活音が聞こえるので、おそらく土日が休みなのだろう。今日は日曜日で、外出しているようだ。もしムギがベランダから迷い込んできたのなら、窓を開けたままにしているはずだ。そのように考えると、長時間留守にする可能性は低い。

仕方がないので「四〇六の井上です。猫が迷い込んだようなので預かっています」と簡



単なメモをドアに挟んでおいた。

部屋に戻ってみると、ムギの様子がおかしかった。

さつきよりも動きが早くウロウロと速度を上げて歩き回っている。そして、突然動きを止めると、お尻を上げて踏ん張ろうとした。その瞬間、俺は何が起ころうとしているのか理解した。

おいおい待てよ。勘弁してくれよ。我が家には猫の砂なんかないぞ。

俺はやっと動きだした頭で必死に考えを巡らせた。部屋の中で粗相されるなんてまっぴらだ。

その時思い出した。そうだ、新聞紙だ。母方の祖母が猫を飼っていた。その猫のトイレはたしか細かく切った新聞紙だったはずだ。

俺は新聞紙を持つてくると片手に持ったまま、そっとムギを抱き上げた。ムギは暴れることもなく、驚くほどおとなしく俺の腕に収まっている。

猫は自分の臭いがしないとトイレだと思わないんだよ、とばあちゃんが言っていたのを思い出し、抱いたままムギの尻に新聞紙を無理やりこすりつけた。するとムギは小さく鳴くと体をよじって腕の中から逃げ出した。

「ごめん、しょうがないんだ。許してくれよ」

俺は浴室から洗面器を持つてくると、簡易シュレッダーで先ほどの新聞紙を縦長に細く

切り洗面器の中に入れた

そしてそわそわしているムギをもう一度抱き上げると、そつと新聞紙がわさわさとして入っている洗面器の上に置いた。

「ムギ。ここがトイレだ。頼むからここで用をたしてくれ。そうじゃないと俺が困るんだよ」

こんなところ入っていられるか、というようにムギは俺をにらみつけるとひらりと簡易トイレから飛び出し、またうろうろと歩き回る。俺はもう一度ムギを抱き上げ、洗面器に降ろす。ムギはまたひらりと飛び出る。そんな同じことを何度も繰り返した。

「ここだって」

思いのほか大きな声になってしまったことを意識しながら、もう一度洗面器に降ろすと不服そうなムギと目が合った。

「いいか、これだけは譲れないからなっ」

俺も負けじと睨み返す。

一人と一匹の視線の中には言葉では言い表せない緊迫感が漂っていた。まるで、古の武士が決闘を前にした瞬間みたいだ、と思いつつ、気合をいれてムギをにらみ続ける。

ふっと、琥珀色の瞳が少しだけ緩んだ気がした。ムギがクンクンと新聞紙のおいを嗅ぎはじめ、ここかと言うように俺を見上げる。

「そうだ。ここがトイレだ」

ムギは何回か自分から洗面器に出たり入ったりしていたが、すつと座って両足を安定させた。しばらくすると、シャー、ポトンという音が立て続けに聞こえてきて、思わず俺はこぶしを握りガッツポーズを作った。

すつきりしたムギはストーン、と洗面器から飛び出ると、仕方ないからここでしてやった、という表情で俺を一瞥した。そして当然のごとく部屋中を女王様然でまた歩き始めた。

「お前、なんだよ、その態度」

腹が立ったが、まあ、いい。粗相されなかったのはありがたかった。

「くっさー猫のおしっこってこんなにくさいのかよ」

この洗面器もう二度と使う気にはなれない。あとで買うことにしよう。

スーパールのビニール袋に新聞紙と排泄物を入れて片付けながら俺はふつと気がついた。

この猫が来てから、茜のことを忘れていた。

「忘れていた」というのは、それまでずっと考えていたということだ。その事実にも同時に気がついた。

しばらくそんなことをぼんやりと考えていたら、ムギがニャーつと鳴いた。

「今度はなんだよ、はらが減ったのか？」

ムギは足元にやってくると、ゆっくりと上目遣いで俺を見上げた……。

「うっ」

ズキユンと俺のハートを打ち抜く音が聞こえた。

ムギの甘えた表情は、さっきまでトイレをめぐって俺とにらみ合っていた猫と、同じ猫とはとても思えなかった。

その小さな瞳は、子供がお菓子をねだるような無邪気さに満ちていた。まるで天使のような純真な瞳の光に、俺の心は瞬く間にトロトロに溶け出した。

バカバカ。俺のバカ。こんな天使のようなムギを俺はさっきにらみつけてしまったではないか。

気をつける、騙されるな、という警告の声が頭の中で聞こえた気がしたが、この愛くるしい表情に心を奪われてしまった俺は、そんなこと、もうどうでもよくなってしまった。

今まで猫好きの人たちがどうしてあんなに夢中になるのか理解できなかったけど、今の全てのがわかった気がする。

分かったことは甘えたときに見える猫の表情の破壊力は絶大だ、ということだ。

「何か、食べるものはあったっけ？」

いそいそと俺は立ち上がり、冷蔵庫や戸棚を探したが、ムギが食べられそうなものは何もなく。それどころか、人間の俺ですら食べられそうなものさえ見当たらなかった。

そうだ、引越してからここ二か月、まともな食事はしていない。ときどきコンビニ

で弁当を買うくらいだ。

「仕方ない。買い物、行ってくるよ」

俺がいない間、ムギがいたずらをするんじゃないかと不安にはなったが、今まで見ている限り、おとなしい猫だと思われた。とりあえず壊されて困るパソコンだけはケースにいれ、デスクの引き出しに片づけた。

いつも出しっぱなしだったパソコンが片付くと、ただでさえガランとした部屋がさらに広く感じられた。

「いいか、ムギ、いたずらするんじゃないぞ」

俺が言うと、ムギは目を細めて、わかったとでもいうように、しっぽをパタ、パタとゆっくりと上下に振った。

五月の日差しはまぶしいほどに輝いていた。

久方ぶりの外出らしい外出だ。といっても、行先はスーパーだ。

俺は久しぶりに外の空気に触れ、何とも言えない清々しさを感じた。

家から歩いて十五分のスーパーワカサに着くと、俺はマスクをつけ、手指消毒を済ませながら店内を歩き始めた。

こんなに多くの人々を見るのも久しぶりだ。毎日見るのはパソコンの平面に映る仕事仲

間の顔か、コンビニの店員くらいだ。

一種の新鮮ささえ感じて、しばらくいろいろな顔、様々な表情を、ほんやりと足を止めて眺めていた。家族連れに老夫婦もいる。それぞれが楽しそうに買い物をしている。

ただ買い物しているだけの人さえ、ついつい観察対象にしてしまうほど、俺はずっとひとりぼっちだったのだといまさら気が付く。そういえばテレワーク中に、取引先の人がビデオ通話を終えた後で、上司から「井上、パソコン越しでも感情を見せないと、お客様に失礼だよ」と注意された。

いつの間にか、俺は喜怒哀楽をどこかに置いてきてしまったのかもしれない。

通り過ぎる人たちをしばらく眺めた後、猫缶を探そうと歩き出したが、気がつくとなんとなく食材コーナーで立ち止まっていた。

以前は料理をするのは俺の役目だった。でも、茜がいなくなってからは、気力がなくてコンビニ弁当ばかり食べている。

食材を見ているうち、自分でも驚くほど、久々に何か作りたい衝動にかられた。

俺は野菜売り場に足を運ぶと、新鮮なトマトを手に取った。次にレタス、人参も。そう、サラダでも作ろう。

そう思った瞬間、何か温かい料理も作りたくなって、目に入ったステーキ用の肉をカートに放り込んだ。

これはただの食欲じゃない、何か違う。

久しぶりの外出でわき上がる高揚感だろうか。それとも家に誰がいる、という久しぶりの感覚のせいだろうか。それが茜じゃなく、ただの迷い猫だったとしても。

それら全部が、俺を抜け出せなかつた沼から引き上げようとしてくれている。

久しぶりに料理する、と決めたらその瞬間、微かな満足感を覚えはじめた。食材がカーブに積み上がるたび、心も軽くなってくる。

最後に、ムギのエサを買うためにペットコーナーに足を運んだ。

しかし、そこに足を踏み入れた途端、目の前に広がった景色に俺は口をあんどくりさせた。両サイドの棚一杯に並んでいたのは想像以上に多種多様な猫缶とフードだった。

魚味、鶏肉、ビーフ、野菜ミックス、高級ブランドからお手頃価格まで。

「すごいな、こんなに見えるのか。人間の食事より豪華じゃないか」

エサなんて言っていられない。豪華なフルコースができてしまいそうなラインナップだ。俺は目を丸くしながら、整然と並んだペットフードの壁を見て回る。

「あいつ、何が好きなんだろう」

隣のおばちゃんの猫まで声が頭に浮ぶ。あの声の調子だと、ペットフードじゃなくて、高級な肉のゆでたやつみたいな豪華なエサを食べていそうな気がする。

これか、あれか、と考えながら、最終的に、魚と鶏の猫缶を一つずつカートに放り込ん

だ。隣のおばちゃんはいつ帰るかわからないが、余ったならお土産に持たせればいい。

レジで会計を済ませ、袋詰めをしていると、改めて日常のありがたみをふいに感じた。こんな小さな買い物一つにも、幸せが味わえるんだな。

そして誰かのために何かをするのも久しぶりで、楽しいことだったのだと思いついた。

買い物から帰ってくると、ムギの姿はなかった。

代わりに出迎えたのは床に散乱したたくさんの本たちだった。本棚に並べてあったはずなのに、なぜ床に？

「ムギ、どこにいる？」

叫ぶと、カーテンがグラグラつと揺れた。上の方から微かに鳴き声が聞こえた。

目を上げると、そこには信じられない光景が広がっていた。

ムギがまるでカーテンの模様に取り込まれたかのように同化していた。

「え？」

よく見ると、ゆらりゆらりとカーテンにムギがぶら下がっている。

「ムギ！」

俺が思わず叫んだ瞬間、ムギはまるでプロのボルダリング選手が壁を移動するように、縦横無尽に動き回り始めた。



本棚を見ると、見事に空になっている。これもムギの仕業に違いない。

「ムギーイイ」

炎のような怒りを胸に、俺はムギを捕まえようとカーテンに近寄った。しかし、ムギの動きは素早かった。

爪でしっかりとカーテンの繊維に引っかかり、一気に数メートル上昇。

次に短い距離を横に移動して、再び上に向かってスプリントする。

その動きは衝動的に見えるが、計算されつくされていた。俺が近づくとたびに猫らしい身体能力と敏捷性を炸裂し、上下左右に、ひよいひよいと俺から逃げ回っていた。

ムギの毛並みが、カーテンの色とあいまって、一種の美しいダンスのようでもある。

ただ、それは俺にとってはカーテンに対する冒瀆でしかなかった。

「やめてくれ！これ二ヶ月前に買ったばかりのカーテンだぞ！」

そうだ、そして高かったのだ。

大声を出したためか、ムギはストーンとカーテンから降りた。そのすきに近くに寄ってカーテンを見ると、すでに爪とぎをした跡なのかボロボロになっている。

しかも、しかもだ。

カーテンの横に貼ってあった、俺の愛するアイドルユニット「ローラリズム」のセンター沢渡まゆ、通称まゆりんのポスターまで破られている。化粧品メーカーに勤めている友人

から手に入れたレアものだ。

キュートなまゆりんの顔が左、四分の一がだらんと下にぶら下がっていた。

さつきまであんなにおとなしなかったのに、なんとという猫だろう。猫をかぶっているというのはムギのためにある言葉にちがいない。

ちよつとでも天使のようにかわいいか思った俺が馬鹿だった。

涙目になっている俺の横をムギは知らんぷりして通りすぎ、買ってきたスーパーの袋の中にガサガサと頭を突っ込んでいる。

「お、ま、え……なあっ」

こういう時、猫にどういうしつけをするべきなのか俺にはさっぱりわからなかった。叩くのがいいのか、大声を張り上げるのがいいのか。でも、俺の猫ではない。暴力はよくない。それだけはわかった。

振り上げたこぶしをどう逃がせばいいのか見当もつかず、あきらめた俺は深くため息をついてから鶏肉の猫缶を袋から取り出した。

プルトップを引いて缶を開けると、その音に敏感に反応したムギが、俺の足元で待ちきれなくなったのかウロウロし始める。上品な見た目のムギだが、食事になると本能の方が勝るのだろう。全身から猫らしい興奮が溢れ出している。

その目は俺の手元に釘付けで、耳は一瞬を逃すまいとしているのか前向きのみまだ。猫

缶の中身を皿に移す動きを、ムギが飛びつかずに我慢しているのがなんとも言えない。

あんまり見つめているのが面白くて、手に持った皿を立ったままの状態ですぐに右に左に動かすと、皿に視線をロックオンしているムギの視線も右に左に動く。

そのうち、我慢できなくなつたのか後ろ足で立つて俺の足に前足をかけてきた。

カーテンみたいに、俺によじ登られたら困るので意地悪はもうやめよう。

皿を床に置くと、上品な姿からは想像もつかないくらい、ムギはがつつくように食べ始めた。

口を開き、一片の鶏肉を確実にとらえるとむしゃむしゃと咀嚼する。一心不乱にがついて食べているムギを俺はしゃがんで眺めた。

食べるのが生きるための本能であることを、改めて認識する。食べている姿は、何もかもを忘れた純粹な喜びで満ちている。

誰かが、それが猫でも、目のまえで食事をする姿を見るのも久しぶりだった。

俺は孤独を自分だけで抱え込み、誰にも知られずにじっと耐えていた。いや、自分では孤独であることさえ認めていなかった。

発酵した孤独は毒へと変化し全身を蝕んで食事すらまともに摂る気力を俺から奪った。

ムギの一心不乱に食べる姿を見るまでは、食べるという喜びを思い出すこともなかった。あつという間に猫缶を食べ終わったムギはさつきまでの食べ物に対するがつついた態度

から一転、落ち着いた表情に戻った。やっと満足したのか今度はベランダ近くに移動すると毛繕いをしはじめた。

その姿を小さく微笑んで眺めながら俺はキッチンに立った。簡単にサラダを作ると小さなステーキ肉をフライパンに投入し、いつも通りの順番でスパイスを振りかけた。

久しぶりの料理だが、腕は落ちていないようだ。俺の信頼する古いフライパンも絶好調でジュー、といういい焼き音をあげている。部屋にいい香りが広がりはじめたころ、気が付くとムギが足元にいた。また甘えたような瞳でジッと見上げていて俺は思わず飛び上がる。

「お、おまえ、まさかあの猫缶だけじゃ足りなかったのか？」

「そうだと言わんばかりにムギは俺の足に熱心に頭をこすりつけてくる。」

「うそだろ？」

「こんな上品な顔して、とんだ大食漢だ。」

「いやいやいや、食べすぎでしょ。もうあげないからな」

料理が出来上がり、俺は一皿一皿をリビングに運んだ。

サラダのグリーンが鮮やかに、ステーキの焼き色が絶妙に、そしてパン。久しぶりの手料理がテーブルに所狭しと並んだ。

今、まさに食べようとした瞬間、ストーンとテーブルにムギがのぼってきた。

「ダメだっ！」

せっかく作ったごちそうをこの美しい顔をした悪魔にかすめ取られるのはもう勘弁だ。

仕方ないので、残っていた魚の猫缶を皿にあげて床に置くと、ムギはさきほどの勢いはないものの、また一心不乱に食べ始める。

その姿を横目に見ながらナイフとフォークを手に取り、切れ目を入れてステーキをほおばった。ジューシーな肉汁が口いっぱいに広がり、思わず笑顔になる。俺の嗅覚と味覚はそのおいしさで一氣に目を覚ました。

レタスとトマトの新鮮な味わい、パンの小麦の甘みと酵母の風味。どれもかみしめるたびに身体全体に元気をよみがえらせてくれるようだ。

さまざまな食感を楽しみながら、久しぶりに自分でしっかりと料理を作ったことが単純にうれしかった。

そして、何より、この瞬間、誰かと一緒に食事をすることの喜びを、俺はうつすらと思出し始めていた。

闇の中から声が聞こえる。

「和樹、会いたい」

茜の声だ。やがてモニターに浮かびあがった茜はいつもと違って、切羽詰まっているように見えた。

「だめだよ。まだ、コロナは収まっていないだろう」

俺は言う。

茜の瞳にはモニター越しでも切なさや求めるものが詰まっているように見えた。

「でも、辛い。和樹に直接会いたい。もう、半年以上、リアルで会ってないんだよ」

「しかたないじゃないか。みんな我慢してる。しかも茜は看護師じゃないか。最前線でコロナと戦ってる。ワクチンだって広まってきている。もう少しの辛抱だ。がんばろう」

しばらく黙っていた茜はやがて口を開いた。

「どうして……どうしてわかってくれないの。私は、和樹とリアルで会いたいの。体温を感じたいのに」

「だから、もう少しがんば……」

がんばろうよ、という言葉は、茜の悲痛な声でかき消された。

「ばか、ばか。もういい。今じゃなきやいけないのに。今、すぐ、私は和樹に会いたいの！ わかってくれないなら、もう、いい」

そして、画面は暗くなり、通信終了の文字だけがパソコンに残っていた。

ベッドから起きると、全身が汗で湿っていることに気づいた。

「夢か……」

久しぶりに満腹になってベッドに横になったら眠ってしまったらしい。

それにしても、あの時の夢を見るなんて、昨日のSNSの画像のせいだろう。食欲を満たして久しぶりに味わった小さな幸福感は夢のおかげですでにどこかにすつ飛んでいた。

夢の残響がいつまでも頭から離れず、ボーっとしていると、ムギが何かをくわえて俺のベッドにストンと上ってきた。

「ん？ムギ、なんだ？」

手に取るとそれはほこりだらけのヌーコアラというキャラクターのぬいぐるみだった。置きっぱなしにしていた段ボールの中からムギが見つけてきたに違いない。遊んでくれというように、ムギがまた甘えた愛くるしい瞳になって俺を見上げる。けれど俺は、そのぬいぐるみを見たとき、動けなくなった。

このぬいぐるみを手に入れた当時、俺はキングダムフォレストというゲームに熱中していた。

このゲームに出てくる「ヌーコアラ」はコアラが元になって普段はボーっとしているけれど、戦闘になると最強に近い能力を発揮する大人気のキャラクターだった。

ふわふわの毛、ちよっとほけた表情、短い四肢。俺はヌーコアラのすべての要素に魅了されていた。

俺はクレインゲームコーナーで、ガラスケースの中心にひと際輝くヌーコアラのぬいぐるみをゲットするため、毎日のように仕事帰り、町のゲームセンターに通っていた。

しかし、不器用さも手伝って、何度トライしても取ることはできなかった。

クレインの爪がヌーコアラに触れ、いいぞ、いいぞと心で叫ぶが、次の瞬間、爪はふわふわの体を掴み損ね、再びガラスケースの底に落ちていく。これが毎回つづいた。

その日も俺はヌーコアラ狙いで必死にクレインゲームと格闘していた。

「もっと右から狙うんですよ」

不意に、後ろから声が聞こえた。

俺が振り返ると、そこに立っていたのは、明るく穏やかな顔をした若い女性だった。名前は知らないが、その顔は何度かこの場所で見かけたことがある。

「あ、ありがとうございます」

俺は女性のアドバイスに従って、再度アームを動かした。しかし、結果は同じだった。いつもより滞空時間は長かったものの、ヌーコアラは無常にもケースに落ちていった。

「よかつたら、私に取りましようか？」

女性が微笑んで提案してきた。

俺は少し照れくさかったが、ありがたくその申し出を受けた。

女性はゲームの操作パネルに立ち、じっと観察した後、操縦スティックを滑らかに動か



した。

クレーンがゆっくりと降下し、ヌーコアラのふわふわとした耳にしつかりと引つかかる。無事に落下口まで運ばれた瞬間、俺は「すごい！」と叫んでいた。

「実は、必死に取ろうとしているのを時々見ていて、気になっていたんです」  
女性はちよつと照れたような笑顔で言った。

「え、マジで？」

「うん、私もヌーコアラ、好きなんです」

彼女は笑った。それが茜との出会いだった。

それから意気投合してとんとん拍子に交際が始まった。

一緒に料理を作って、煮詰まった仕事から逃げるように週末を楽しんだ。近くの公園で手をつなぎ、秋の風に吹かれながら散歩した。スーパーで買い物をして、二人で何を作ろうか相談しながら笑い合った。このまま、ずっと続くのだと思っていた。コロナという大きな嵐がくるまでは。

看護師の茜はほとんど病院に缶詰めになり、感染のリスクを考えて俺と会うことはできなくなった。話すのはいつもオンラインで画面越しへと変わった。リアルで会えない状況を何とか乗り越えようと、ビデオチャットで頻繁に繋がろうとした。

遠距離恋愛で続く恋人たちもいる。二人もきつと大丈夫だと信じていた。

でも、少しずつその通話に義務感が加わっていたことに自分自身で気が付いていなかった。次第に感じ始めた違和感も些細なことだと放っておいた。

気が付くと、画面越しの茜に対して、初めて出会った日のような熱意や興味を感じなくなっている自分がいた。

手にしただけで甘く、酸っぱい香りが部屋中に充満する新鮮な果実のような気持ちは、オンラインの関係が続くうちに、少しずつ萎み始めた。最初は皮のツヤが少し失われる程度だったが、時間の経過とともに果肉の張りはなくなり、その鮮烈な香りも衰えていった。リアルで感じていた温かさや存在感を、デジタルの世界で俺は受け取ることができなくなっていた。

会いたい、という茜の申し出を断ってから彼女と連絡が取れなくなった。何回かLINEを送ったが既読にはなるものの、返信はなかった。うしろめたさと不安を抱えながら二か月経った頃だった。

「話したいことがあります。今夜ビデオチャット、できますか？」

その日の夜、画面が繋がり、映し出された茜の顔は以前より疲れが見えたが半面、何か吹っ切れたような表情にも見えてとれた。

「和樹、ひさしぶり。連絡しなくてごめんね」

茜の声は以前と同じだが、どこか距離を感じた。

「うん、茜も元気にしてた？」

俺が尋ねると、彼女は少し微笑んでうなずいた。

ビデオチャットの画面で茜の顔を見つめながら、俺は何度も練習した言葉を口にしようとしていた。

謝りたかった。会いたいと言ったのに会わなかったことを。本当は自分も会いたいと思っていたことを。

「和樹、実は話があるの」

彼女の表情が硬くなる。何か大きなことを告げるような空気が漂ってきた。

「あのね、別れてほしい」

言葉が出ない。頭の中は真っ白になった。いろんな感情が渦巻いて、何を言えればいいのか分からなくなる。

「近くにいるくれる人がいいんだ。今は、そばにいてくれて、支えてくれる人がほしい」

「このビデオチャット越しの俺じゃだめだってことだね」

心の動揺と裏腹に、意外と冷静な声が出て俺は自分で驚いていた。

「会いたいって言った時ね、あの時、私の担当している患者さんが二人、立て続けに亡くなったの。どうしていいのかわからなかった。看護師になっても、人が死んでいくことになれないっていうか。もちろん、慣れちゃいけないんだけど、辛くて辛くて、どうにかな

りそうだった」

なんてことだろう。そんなときに俺は、茜を突き放したのだ。茜は一度言葉を切ってからつづけた。

「和樹のことが嫌いになったわけじゃない。尊敬もしてる。だけど、一緒に人生を歩んでいくには違うんじゃないかって、この二か月間、私なりに真剣に考えて出した答えなの」

俺は画面を見つめたまま、何も言えずにいた。茜も黙っていた。

内心は混乱していた。別れたくない、と心の底から叫びたかった。

やがて、茜の震えた声が沈黙を破った。

「ごめんね、和樹」

俺は口を開いた。

「分かった、茜。お互いに新しい道を探すときなのかもしれないね」

本当はそうではない。本当は違う。

でも、何故か俺はその瞬間、言いたかった言葉、感じていた感情、すべてを押し殺していた。つまらないプライドがそうさせたのだろうか。俺は素直になれなかった。理解のある顔を装ってうなずいたけど、内心は叫び続けていた。

「ありがとう、和樹」

茜が少しだけ微笑んだ。それは、何もかもが終わる瞬間の微笑みだった。

茜と別れてから、俺はすべてを断ち切るように、引越しをした。茜を思い出させるものはすべて処分した。けれどこのぬいぐるみだけは、捨てられなかったのだ。

ムギはこれで遊んでくれ、と甘えた目で再度、俺を見上げた。

ほこりを払い、そのぬいぐるみをそっと手にとってみる。触れた瞬間、甘くて苦い、温かくて冷たい、そのすべてが複雑に絡み合った想いが沸き上がってきた。

なぜ、茜と別れてしまったのだろう。

どうして会いたいと泣いた茜に会いに行かなかったのだろう。

別れたいと言われた時にやり直そうと言わなかったのだろう。

昨日のことだ。何気なくスマホを開くと、茜のSNSの画像が目飛び込んできた。

画像の背景は病院の待合室でそこで笑顔を交わす茜と、俺の知らない男性が映っていた。茜は看護師の制服に身を包んでいて、その男性も何らかの医療従事者らしき白衣を着ていた。疲れているはずなのに、茜は笑顔で、その男性も彼女を明るく見つめていた。

二人の間にはコーヒートのテイクアウトカップと、おそらく仕事の合間に手早く食べるためのサンドイッチが置かれていた。

仕事の厳しさや疲れを忘れさせるような、ほんのりとした幸せな雰囲気が漂っていた。

— 近くにいてくれる人がいいんだ。

茜の言葉がよみがえった。

「彼氏が、きたんだな」

それから俺は、日本酒を手に取り、水のように飲み始めた。これでよかったのだと、自分に言い聞かせながら。二人の関係性が映るこの画像を頭から消すために。

けれど。

ムギがくわえてきたヌーコアラのぬいぐるみが、今までフタをして、自分で終わったと片づけていた気持ちをあふれさせた。

思い出が胸を満たしはじめ、息をするのさえ辛く、全身が細かく震え始めた。

気がつくと俺は泣いていた。

別れたくないと言えばよかったのだ。

嫌なら嫌と言えばよかった。

悲しかったなら、きちんと泣けばよかったのだ。

ポタポタと涙をぬぐいもせず泣き続ける俺をムギは不思議そうに見上げていた。

どうして遊んでくれないのか、理解できないような表情で俺を見つめていた。

しかし、しばらくすると、ムギはゆっくりと俺に近づいてきた。

ムギはやさしく頭を俺の身体にこすりつけるとやがてゴロゴロと喉を鳴らし始めた。

その音は何とも言えず、温かい響きがあった。

「おまえ、慰めてくれるのか。俺が泣いているのが、わかるのか」

身体をこすり続けるムギを俺はそっと抱き上げた。ムギは静かに俺の腕に収まっていた。そっとムギの身体に顔をうずめた。日向の香りがした。長い毛が顔に当たって心地よかった。

生きている。

そうだ。こいつは生きている。体温を感じる。温かい。これが、リアルなのだ。デジタルの世界では味わえない生きた感覚なのだ。

早く気が付けばよかった。

泣きながら俺は、もう一度ムギを優しく抱きしめた。

チャイムが鳴った。

俺は、ムギと遊んでいた手を止めて玄関を振り返る。時計の針は七時を回っていた。

「帰ってきちゃったな」

ひとしきり泣いた後、憑き物が落ちたようにすっきりした俺は、今まで、ずっとムギと遊んでいた。泣くだけ泣いたら、心の汚れが洗い流され、汚部屋を片付けたような空っぽな気分になった。頭を空っぽにして、ムギと遊ぶのは楽しかった。

ヌーコアラを投げるとムギはまるで犬がするように追いかける。そしてたどり着くと、抱きかかえて後ろ足でネコキックをさんざんしてから、またヌーコアラをくわえて俺のと

ころに持って帰ってくる。

ネコキックで原形をとどめないくらいヌーコアラはボロボロになったが、ムギが気に入ったならそれでいいと素直に思えた。

なんといつても、ムギは俺の恩人、いや恩猫なのだから。

ムギはこの短い時間で、俺にたくさんのことを教えてくれた。

ムギは、今、目の前にあることだけにいつも一生懸命だ。その時その時で、全力で遊び、我を忘れてひたすらに食べた。

自分をさらけ出して、素直に甘えてきた。

ムギの一つ一つの行動が俺の心の凝り固まった部分を少しずつほどいてくれたのだから。

終わったことだと思っていた茜への気持ちはまだ俺の中にしっかりと根を張っていて、俺を苦しめていたことに気づかせてくれた。そして、今度こそ、本当に、茜への想いを終わらせてくれた。

ムギがいなかったら、今もまだ、悶々とふがない自分をサンドバックのように叩きまくっていただろう。

泣くだけ泣いたら、未練や後悔だけでなく、今は茜への感謝さえ感じられるように思えてきたから不思議だ。



まあ、この猫はそんなことを思いもせずにうちに紛れ込んだのだろうけど。

もう一度催促するようにチャイムが鳴った。

「ムギ、ありがとうな」

別れを惜しみながらムギの頭をなでると俺は立ち上がり、玄関の扉を開いた。  
しかし。

ドアを開けると予想に反して、そこにはおばちゃんではなく、若い女性が立っていた。  
しかも、マスクをしていて口元は見えないが、涼やかで優しい目元は俺の愛するアイドルまゆりん似だ。思わず、俺の心臓がドキンと飛び跳ねた。

「あの、すみません。うちのムギちゃんがそちらにお邪魔しているとメモに書いてあったので迎えにきました」

俺の頭は混乱した。どうした？おばちゃんはどこだ？この美人は誰だ？

ムギは俺の後ろから駆けてくると女性の足元にじゃれついた。と、いうことは、この女性が飼い主なのか？

「ムギちゃん、どうしてお隣に行っちゃったの」

女性はムギを抱き上げると声をかける。

「多分、手すりを伝ってきたんじゃないかと思えます」

俺はやや緊張しながら答えた。

「あんな細い手すりを？」

「ホントですよ。よく落ちなかつたなと思って」

「ありがたいございます。網戸を閉めていたはずなのに、開いていたんです。この子、とても器用で、きつと自分で開けちゃつたんだと思います。あ、これ、うちのペランダで取れたイチゴで作つたジャムです。こんなもので申し訳ありませんが、よかつたらどうぞ」  
彼女が差し出した小さな瓶を俺は受け取るとまじまじと見つめた。

これは、毎朝、朝日を浴びてきれいにキラキラと光つていたあのイチゴたちだ。

手の中のルビー色のイチゴジャムを見つめているうち、俺の心の中にも朝日が差し込んでくるような、優しく温かな気持ち次第に広がっていった。

「あのすみません。俺、二ヶ月前に引越してきた井上和樹と言います。大家さんにこんなご時世なので挨拶はしなくていいと言われてしまったものですから、ご挨拶もせず失礼しました」

彼女は微笑んでから小さく首を振つた。

「隣に新しい方が入居されたのは知っていました。気にしないでください。大家さん、少し変わり者ですもんね。私は桜井優花といます。こちらこそ、どうぞよろしく願います」

俺は気になっていたことを切り出した。

「お隣はもつとお年を召した方が住んでいると思っていました。一度、年配の女性の声をおききたんです。ムギちゃん外に出ちゃだめよ、という声でした」

「あ、多分、それ母です。私が扁桃腺を腫らしたときに母がここに来て、看病してくれたことがあって」

気がつくとムギが優花さんの腕から降りて俺の足にまわりついている。

「あら、ムギちゃん、井上さんに懐いてますね。この子、気難しくてなかなか人に懐かないのに、井上さんのこと気に入ったんですね」

そういうと優花さんはうれしそうに笑った。朝日に光るイチゴに似ていると俺は思った。俺はムギを抱き上げた。このモフモフの感触を忘れないようにもう一度、頭をなでると、笑顔の優花さんにムギを返した。

優花さんはペコペコと頭を下げ、「ありがとう」と「お世話をかけました」と「またムギと遊んでください」と何度も繰り返し言っただけで帰っていった。

後ろ姿を静かに見送るうち、彼女の誠実な親しみやすさと礼儀正しさが、俺の心に柔らかな光と風を運んでくるのを感じた。

ムギが帰った後の部屋はガランとしていた。

ボロボロのカーテンと破れたまゆりんのポスターを除けば、昨日までと何も変わらないというのに。

俺は一つ、深呼吸をする。

でも、心は満たされている。それだけで俺は満足だった。

「俺も猫でも飼おうかな」

大騒ぎの日曜日だった。けれど、今までになく温かな日曜日だった。

自分で作った夕食を食べた後、俺は久しぶりに幸せな気持ちで眠りに落ちた。

そして数日後。

大きなくしゃみが出た。

立て続けにもう一回。

なんだ、何が起きた。俺は花粉症じゃないぞ。

そして、ゆっくりと目を開けると……。

琥珀色の瞳を持った、雪のような白色に茶色が混ざったマシユマロみたいな大きな毛玉が、パタパタとしつぽを俺の鼻先で動かしていた。

了

【文学賞】

## 勇者タケさん

こばやし まきこ

「ぼうや、おかえり」

タケさんと初めて出会ったのは小学1年の夏頃。麦わら帽子を被り、虫採り網を持って草むらにしゃがんでいた少年のようなおじいさんに「なにしてるの？」と声をかけたのがはじまりだった。

振り向いたおじいさんは慌てて人差し指を口にあて、

「しいっ おつきなシヨウリヨウバツタが、ほうらそこに．．」

と、雑草をガシガシと食べているシヨウリヨウバツタに真剣な眼差しを向けた。

初めてみた種類のバツタではなかったけれど、堂々と食事をしてる様に、ぼくも釘付けになった。

「つかまえるの？」

ほくは気をつかって小さな声でたずねた。

「うんにゃおいしそうに食べてるから今日のところはやめておこう」

そういうとおじいさんは茂みからすくつと立って、「ほうや、名前は？」と言った。

食事の邪魔をしないよう気をつかっていたのに、おじいさんが立ち上がった勢いでショウリョウバッタはピョンと飛んでいってしまった。

ほくは名残惜しくバッタを見送ってから、逆光で顔がほとんど見えないおじいさんに向けて、

「ユウキだよ、シノダユウキ！」

といつもより少し大きめの声で言った。

おじいさんは「そうかそうか」と優しく頷き、くるりと背を向けどこかへ行こうとするから、ほくは勢いよく、「おじいさんは？おじいさんはなんて名前なの？」と呼び止めた。

「わしか？わしやあタケ・タケ・タケ・」

友だち同士ならすぐに返ってくるはずのこたえがなかなか返ってこないのです、ほくはハツとして「タケさん？タケさんていうの？」と切り返した。宙を仰いでいたおじいさんも何かを見つけたかのような清々しい顔つきになり、「ああタケさん、そう、タケさんじゃ」と呟くように言って、カッカツと笑った。

ほくとタケさんはまるで前からの友だちかのようにおしゃべりしながら並んで帰った。

途中で、見知らぬ女の人が前から走ってきた。そしてタケさんの目の前でゼーゼー息を切らしながら、「お・おじいちゃん、どこ行つてたの・・・」と言った。

「ぼうやと虫採りしとつたんよ、なあ」

タケさんがほくに話を振ってきたので、実際にはほくは虫採りに参加していないけれど、「はい、シヨウリヨウバツタみつけました」と不安げにこちらを見つめている女の人に告げた。

「そうなの、ごめんなさいね」

ほくはタケさんとおしゃべりしていただけだから、なんで女の人がほくに謝ったのかわからなかった。

「おじいちゃん、家はこつちじゃないでしょ、帰りましようね、えつとほくは・・・」

「ユウキです！ほくはこの先曲がったところなので、ここで失礼します！」

あれこれ聞きたいことがあったけれど、女の人が困った感じだったから、今日のところはすぐに帰ることにした。

「タケさん、またね」

タケさんに手を振ると、「おおまたな」とタケさんも笑顔で手を振ってくれた。

家に帰ってお母さんに話したら、「ああよく迷子になるおじいちゃんね」と言っていた。

お母さんは町内の自治会長が誰だか知らないのにタケさんのことは知っていた。だからタケさんは自治会長よりも有名人ということになる。

タケさんとは学校帰りにいつもどこかしらで会う。ぼくが声をかけると、タケさんは、「おおぼうや」と笑顔になって、「ワタルくん、じゃったかのう」と毎回違う名前でもぼくを呼ぶ。

「ユウキだよ！タケさん、ユウキだからね！」

そしてぼくも、懲りずに毎回タケさんに自分の名前を伝える。

一度だけ、本当のぼくの名前を呼んでくれたことがあった。

三度目の正直どころじゃないから、すごく嬉しかったのを覚えている。

でも、それもそのはず、その日は本来教室に置いてこなければならぬ名札をつけっぱなしで帰ってしまったから、タケさんはその名札を見て、正しい名前を呼んだのだ。

学校帰りに会うタケさんはいつも何かを握っている。少し長めの木の枝の時もあれば、まつぼっくりの時もある。猫を抱いていたこともあった。

ぼくはタケさんに「どうしていつも何か拾うの？」と聞いたことがある。するとタケさんは「これはな、ただの拾い物じゃあないぞ」といって、握っていた小さな白い石ころを



両てのひらに乗せて、秘宝に魂を奪われた人のような虚ろな目をしてほくの方を見た。誘われるようにほくも虚ろな目になりそうだったけれど、どう見ても石ころだから、「でもこれ石ころだよ」ときっぱりと言った。

それを聞いてタケさんはしてやったりというような顔で、  
「いいか、よく見とけよ、ほれっ」

そういうと石ころをひょいっと裏返した。

「あっ！」

ほくは思わず声が出た。ただの石ころの裏側には、子供っぽい字で「たから」と書いてあった。どこかの子供がマジックで書いたのだろうけど、それを見つけたらなんて、それはそれですごいと思った。ほくの驚いた顔を見てタケさんは満足そうにしていた。

タケさんは散歩に出ると家に帰る道がわからなくなるらしい。

ほくがもしそうになったら不安で焦って涙がこぼれてしまうと思う。

けれどタケさんはいつだって楽しそうで、目がキラキラと輝いている。

帰り道がわからなくなると不安にならないのかとタケさんに聞くと、

「わしゃ 毎日が冒険じゃあ」

と、腕をぐんぐん振って一層目を輝かせた。ほくはなんだか楽しくなってタケさんの後ろ

について同じように腕をぐんぐん振って、タケさんの家まで行進した。

タケさんの家の前で女の人が立っていた。

「おじいちゃん、どこまで行つてたの、お散歩なら私も一緒に行くから・・・」

女の人が暗い顔をしていたので、ぼくは「今日はりんご公園まで冒険しました！」と元気よく敬礼した。それを見てタケさんも隣で敬礼して、「した！」と元気よく言った。そしてふたたび顔を見合わせてひゃっひゃっひゃっつと笑い合った。

固い表情をしていた女の人が「ありがとう、ユウキくん」とくすくす笑いながら言ったので、「じゃ、ぼく帰ります！」とくるりと回って元気よく腕を振って帰った。

冬が近づくとタケさんは何度も「サザンカにヤメジロだな」とウンウン頷きながら嬉しそうに言う。ぼくはタケさんのお陰でサザンカの花とメジロという鳥を知った。

でもここ最近、タケさんが遠くをぼうっと見ていることが多くなった気がする。

ぼくが「タケさん！」って呼びかけると、周りをキョロキョロと見渡して、「ああそうかそうか」と話と全く関係ない相槌を打つ。

ぼくはそんなタケさんをしばらく観察したけど、理由はわからなかった。

「船橋警察署からお知らせします。本日午後1時頃から高齢男性が行方不明になっていま

す。身長170cm、白髪で痩せ型。お気づきの方は最寄りの警察署にご連絡ください。」

いつも何気なく聞いている防災無線だけど、今日はなんだかソワソワする。身長170cmで白髪の痩せた高齢男性なんて沢山いるのに、なんでかタケさんと重なった。

今日は一段と寒く、夕方から雪がちらつくとの予報だ。

ぼくはドキドキしながら、いつもより多く寄り道をして帰った。

タケさんと初めて会った茂み、タケさんが猫を抱いていた大きな岩のある空き地、タケさんが初めてぼくの本当の名前を呼んでくれた小道。

タケさんとの記憶を辿ってぼくは何カ所も巡った。次こそ、と願っているのにタケさんが居ないからぼくはどんどん焦った。

「あとは・・あとは どこだ」

何かを求めるように寒空を仰ぐと、一羽の鳥がスーッと頭上を通りすぎた。

曇り空だったし、見上げた鳥は腹側しか見えなかったから色も分からなかったけれど、咄嗟に「メジロ？」と口からこぼれた。

「サザンカにやメジロだな」

タケさんの言葉が聞こえてきた。今は1月。サザンカの花が咲いている時期だ。

「確か・・・」

何度か聞いたこのフレーズだけど、一度だけいつものタケさんらしくない感じで呟いていたことがあった。ぼくはその場所を記憶の中で辿った。

「・・・海老川！」

ぼくは自分の家を通り過ぎてランドセルを背負ったまま海老川へ走った。途中の下り坂でおもいきり転んだけど、不思議と痛くなかったからすぐに起き上がってまた走り出した。橋が見えた。確かタケさんとこの橋を渡って、右へ曲がって……。ぼくは川の中をのぞきこんでは少し走って、を繰り返した。川沿いは桜並木だけれど、所々にサザンカが植えてある。確かもう少し先に、以前タケさんが長いこと眺めていたサザンカがあるはずだ。ここが思い付く最後の場所だから、「明日の国語のテスト、0点でもいいから、タケさんと会えますように！」と願いながら最後のサザンカにたどり着いた。

川面の近くにうずくまる人影が見えた。

「タケさん!!」

ほくはハツとしてタケさんに走り寄った。こんなに寒いというのに、タケさんは裸足にステテコ姿でおまけに額から血が出ていた。

「タケさん！怪我したの!?しかもそんなに薄着で！何があったの？」

ほくは慌てて持っていたハンカチでタケさんの額をおさえ、マフラーを首にかけてあげた。なのに、タケさんはいつともみたいに「ああシンスケくん、お帰り」と微笑んだ。

「タケさん、そんな格好じゃ風邪引いちゃうから早く家に帰ろう」

ほくはこのときばかりは名前を訂正するのを忘れていた。

タケさんの手は雪のように冷たかった。

タケさんをタケさんの家に送り届けると、

「母さん、ただいまー」といつものようにタケさんは挨拶した。

家の奥からバタバタと足音がして、女の人が走ってきた。

「おじいちゃん！どこいったの!?ああこんなに冷えて・・・」

女の人はタケさんを毛布でくるんで暖房のきいた部屋へ連れていった。そして「おじいちゃん、ここで温まっていてね！」と少し強めの口調で言い、またバタバタと足音をたててぼくの方へ走ってきた。

「ユウキくん、本当にありがとう。いつもおじいちゃんがごめんなさいね」

と申し訳なさそうに言った。

「だれも悪くないです。だから、ありがとう、だけで大丈夫です！」

ほくは女の人にそう告げてから、「タケさーん、お大事にねー！」と部屋の奥のタケさんに呼び掛けた。

「はーい ありがとさーん」

いつものタケさんの声に安堵してほくはタケさんの家を後にした。

「船橋警察署からお知らせです。本日午後に行方不明をお知らせした高齢男性は無事に発見されました。ご協力ありがとうございました。」

家に着く直前にタケさんが見つかったことの知らせが防災無線で伝えられた。

次の日、タケさんの家の女の人がほくの家に来た。お母さんと女の人でなにやら話始めたが、まもなくして、「ユウキーー！ちよつといらっしやい！」と呼ばれた。

階段を下りて玄関へ行くと、タケさんの家の女の人がほくに笑顔で会釈した。ほくもつられて会釈したが、何を話せばいいのかわからなかった。

「ユウキくん、この間はおじいちゃんを見つけてくれて本当にありがとう。たくさん探し

てくれたの？」

女の人は申し訳なさそうに言った。

「タケさんと一緒に行った場所、たぶん全部巡ったよ。」

ぼくは少し自慢しなくなったからタケさんとぼくとの思い出をいくつか話した。

「そういえばタケさん前に、シズエが海老川に落ちそうになったことがある、って言うってだけ……」

その時のタケさんの顔がすこし恐くみえたからなんだか触れちゃいけない話題なのかと思っていた。

「ああ、それね、私のことなの。」

「えっ！」

女の人は照れ臭そうに笑った。ぼくは初めて女の人の顔をよく見た。

「シズエさん？」

「はい、シズエです。」

タケさんの話の中のシズエと女の人がつながって、ぼくの散らかった頭の中がキュッと整理整頓された感じがした。

「じゃあ、川に落ちそうになったっていうのは……」

「だいぶ前よ。私が幼稚園の頃。」

「それって冬の事？」

「そうね、今くらいだったかしらね。おじいちゃんね、行方不明になる前にいきなりシズエー！って叫んで外へ出てっちゃったの。私、台所に居たのよ。」

そう言うシズエさんは、困ったような顔で笑った。

いつものタケさんは少年のようだったけど、そういうときは父親の顔になるんだ。前にみたタケさんの恐い顔は、真剣な父親の顔だったんだ。

ぼくはタケさんに会いたくなくなった。

しばらくタケさんに会わなかったからぼくはすぐに学校から家に着いた。こんなにも近い距離だったのかと、ちょっとつまらなく感じた。

タケさんに会わないうちに桜の咲く季節になった。きっと海老川沿いは桜のトンネルができているだろう。

「よおーお帰り！えつと、ミチオくん」

待ちわびた声が聞こえた。ぼくの名前じゃないのにぼくのことだとすぐにわかった。



「タケさん!!」

ぼくは勢いよくタケさんのもとに駆け寄った。

「タケさん!もう大丈夫?元氣?」

「いよおー元氣よお」

「タケさん、冒険もするし、人助けもするなんて、勇者だね!勇者タケさん!」

「勇者タケさん、かあ。そりゃあいい」

タケさんはカッカッと笑った。

「それじゃ、勇者タケさん、今日はどこいく?」

「そうさな、ツツジの蜜を吸いにいこうや」

「うん!」

こうして勇者タケさんとぼくの冒険は再び始まった。

【文学賞】

うさぎ・悲しみ

松波直子

「うさぎ」

ある時

うさぎを飼っていた人が言った

家族よりうさぎが大事

またある時

その人が言った

うさぎは

寂しいと死んじゃうんだって

守るべき柔らかなもの

純白の毛が震えている

在りし日

年老いた父母もうさぎであった

血縁に交じる水のような無関心

遠い幻想

寂しさは人を殺す

こころは

求めることをやめない

生あることは切ない

誰のこころにも

うさが棲んでいる

守るべき柔らかなもの

幻想の檻を開けて

わたしから

あなたから

普通の声で

驚かせないように  
純白の毛を撫でることは  
出来るかもしれない

「悲しみ」

海が沸騰し

雲は

発生したくないのに  
量産される

雲は悲しかった

空を覆う雨雲

悲しみの奥底には怒りがある

抱えきれなくなつて

地上に叩きつける豪雨になる

空と地とその間

放たれた水は

流れる場所を求めて

暴れまわり

河川と平地の境を失くし

営々と築いたものが瓦礫と化して

人々を被災者にしてしまう

人の哀しみが

嗚咽になって蹲る

海と陸とをつなぐ空

雲もどうしようもなく悲しい

人もどうしようもなく哀しい

それでもまた

空は

何もなかったように晴れて

光を降り注ぎ

沈黙の闇に星を瞬かせる

繰り返される悲しみ

繰り返される平穏

そのなかを

傷ついた地球が

浮かんでいる



【文学賞】

おどろばやし  
行々林週報

山口 正明

屋外の蛇口の布を解きほどく冬眠終えし水迸る

櫟の木樹皮がボロりと剥がれ落つ公団住宅の壁のごとくに

里山のボランテアへと向かう朝無患子むくろじは飴色の実をつけており

草刈り機のチョーク引きたりエンジンの唸りの中で意識を研ぎぬ

頬白のさえずり響く休耕田一筆啓上イキテオリマス

三本の苗をつまみて植え進む畔田にできる緑の破線

ざっくりと筍の根に刃を入れる世界に現る真白き断面

食草を地植えて育て待つ五月麝香揚羽じゃこうあげはのベージュの飛来

プラスチックから紙となりたる保険証二軍に落ちた気持ちになりぬ  
梅檀の紫の花が連なりて山岳部主将A君が逝く

花粉管そろりと伸ばせ幸水の花芯に紅き花粉を付ける

行きつけの蕎麦屋が昨日閉店す器をどうぞと戸口に並べ

犬四手の雄花を垂らす木曜日村上春樹の新刊を買う

大葉子を踏みて向かえり野の作業鎌、鋸と鋏を腰に

稲だって草の仲間だ長き穂に小さき白き花を付けたり

凶事あり 我は棘ある胡瓜もぐじりじり近づく陽光の下

赤、黄、黒、上溝桜うわみずざくらの実を浸けて年末の酒を心待ちにす

訪れたこともなき瓦礫の街を帝国書院の地図でなぞりぬ

黄金色の鈴身の谷津田に差羽舞さしぼうわが風を運べアジアに向けて

鎌を持ち慣れぬ手つきで稲を刈る稲一株で飯一椀だ

山繭蛾青き繭より抜け出でて谷津田の中を今飛び立ちぬ

葉に棲まうジエミニウイルス太古よりきみはそうして生きてきたのか

彼岸花血のごとき蕊伸ばしおり実をつけずとも疎まれるとも

十月によくやく仕舞う扇風機発泡スチロールのぴたり納まる

三重さんじゅうに女郎蜘蛛じゅうが網を張る哲人のごとく見えなくもなし

カレンダーに二か月分の予定書く一つ仕事を終えた気がする

「粒すけ」の新米頬張る収穫祭退職日より二年が過ぎぬ

偉丈夫の会津八一に向かいおり日々真面目しんめんぱくあるべしという

欠札の葉書に書かれた年齢を六十路で逝きし母と比べる

夕刻の行々林に浮かびくるラフマニノフの曲ヴォカリーズ